

AMCWA 会報



NPO法人 アジア母子福祉協会

東京都品川区西五反田2丁目15番7号

ジブラルタ生命五反田ビル3F-ITL

mail: tokyo@amcwa.org tel: 03-6424-5681

アジア母子福祉協会20年の足跡と展望

若い人材の参画を切望

アジア母子福祉協会 理事長 山口洋一

20年前に発足したアジア母子福祉協会は、当初よりミャンマーを主たる対象国とし、(1)相手国についての正しい理解の増進、(2)相手国への支援、(3)相手国との交流、を事業内容として活動してきた。

長期にわたり政権を掌握してきた軍事政権に対して、欧米のメディアが強烈なバッシングを続け、日本の報道機関もこれと平仄を合わせてきた時代においては、とりわけ(1)の事業が重要であった。

軍事政権=悪玉と決めつける欧米の認識は実情を著しく歪めて捉えており、実態とかけはなれていた。この国の軍事政権は彼らなりに、自国の実情に合った形で国造りに邁進してきたのである。彼らとて最終的に目指すのは民主主義体制であるが、それに至るプロセスは自国に適したやり方で進めて行こうとしていたのである。欧米が要求するように、直ちに民主体制に移行したのでは、かえって混乱を招く危険が多く、時間をかけて慎重に進める必要があった。そこで軍事政権は2004年に「民主主義への七段階のロードマップ」を発表し、これに即して2011年に民政移管を実施し、その後も順調に国造りを進めているのである。

民政移管後はミャンマー・バッシングは収まったが、それまでの実情を無視した歪んだ報道は、ひど

いものであった。そこで私は、国内各地での講演会、雑誌などへの寄稿や単行本の発刊、テレビ番組への出演などを通し、歪んだ報道を是正し、正しい認識の伝播に努力してきた。

民政移管してからは、日本の企業進出の機運も高まり、企業の関心もこの国に向けられるようになったので、いくつかの企業の協力を得て、(2)の支援に力を入れるようになった。医療、教育、住民の生活改善などの面で、支援事業を展開してきた。

(3)の交流事業としては、発足間もない時期に、当時ミャンマー母子福祉協会の理事長でおられたキン・ニュン首相夫人の一行を日本に招待した。当方からは当協会が主催してミャンマー視察旅行を数回にわたり実施してきた。

ミャンマー一辺倒だった対象国は、その後マダガスカルの第一人者である石原晃氏が役員となったお陰で、この国が加わった。マダガスカルはアフリカに近いが、実は住民はアジア系で、アフリカ大陸諸国とは異質の国柄なのである。

当協会の今後の展望としては、活動内容を一段と充実させ、重要性を高める。そのためには役員、会員の若返りがひとつの課題である。若い人材が当協会の趣旨に賛同し、是非加わっていただけるように切望している。



ミャンマーへのささやかな貢献

アジア母子福祉協会 副理事長 山根隆治

50年来の友である寺井君からお誘いで、アジア母子福祉協会に加入をさせていただいてもう7年になります。

私が外務副大臣をしていた時、彼がミャンマーの様々な問題について熱く語ってくれたので、本来アジア地域は私の担当エリアではなかったのですが、玄葉大臣と山口副大臣の了解を取ってこの国だけは私が担当することになりました。

当時、西側陣営ではまだまだ軍事政権の悪しきイメージが強く国際社会に一刻も早く受け入れてほしいというミャンマーの願いは果たされていませんでした。そこで欧米への開扉の先導役を日本が果たさなくてはと、様々な施策をとっていくことにしました。その際、アメリカの国務省には密な連絡を取っておくように指示しました。その後、クリントン国務長官など各国の指導者がミャンマーを訪問するな



ど国際社会への復帰が実現していくことになっていきました。

更に本会としては労働組合の連合、東京電力労組からの支援金の協力もいただけることになるなど、寺井君との二人三脚で一定の成果をあげてこられたことは、私にとり大きな喜びともなっております。

それにしても、こんなにも人の使い方がうまい人間はそういるものではないだろうと思います。



クリントン国務長官とテインセイン大統領(当時)

■ 訃報 石原晃専務理事が3月14日、肺梗塞によりご自宅で急逝されました。享年72歳、謹んでお知らせいたします。石原様はマダガスカルで多大な業績をあげられ、次号の会報で改めてご紹介いたします。ご親族の連絡先は次女、阿部雅玖(まき)様、〒254-xxxx 平塚市XXXXXX 電話 xxx-xxxx-xxxx です。

マダガスカルに通い続けて

アジア母子福祉協会 元専務理事 石原晃

当協会が無事に20周年を迎えられたことは、会の一員として大変喜ばしく思います。恐らく設立から軌道に乗るまでは多くの困難があったことと思います。私が正式に参加したのは2011年からですので、この間の理事長はじめ会員の皆さまのご苦労は分かりません。

私と活動地マダガスカルの関係は1975年以来ですから、早いもので45年になりました。マダガスカルはアフリカ大陸の東南部に位置し、モザンビーク海峡で大陸とは400キロ離れています。国土面積は日本の1.6倍、推定人口は約2,500～2,700万人。大陸と離れたことで独自に進化した固有動植物が多い国です。残念ながら固有種の多くは絶滅の危機に瀕しています。

アフリカ諸国の中では最長の海岸線なので、排他的経済水域もアフリカでは最大の広さを持ち水産資源にも恵まれ、エビやマグロは日本にも輸出されています。地図上ではアフリカ圏ですが住民の過半数はアジアから渡っていった人々の子孫、およびアラブ圏・アフリカ大陸・インド亜大陸からの移住者が混ざり合って非常に興味深い面白い社会・文化を形成しています。

マダガスカルでの活動：2009年からの活動を現在も継続中です。それ以前の2006年に植林の必要性を訴えていましたが、実施する人は殆どいませんでした。要は口で言うだけではダメで自分たちが実行する事が大事です。大上段に言えば植林を始めた動機はマダガスカル環境・多様性保全のためですが、自分たちがやりたかったのです。この間に環境・生物多様性・温暖化などが世界的な問題となり国際条約も増え、必要性の認識は急激に高まりました。この活動を支えていただいた多くの皆さまにこの場を借りて心から感謝します。特に2015年から助成していただいているイオン環

境財団様、ご寄付を頂いた有志の方々、強行日程での作業にも嫌な顔もせずにつき合ってくるマダガスカル友人たちには感謝してもしきれません。

主な活動場所と内容：首都圏内各地、首都南部80キロのアンバトランピ市、更に100キロ南のアンチラベ市、北西部海岸の最も漁業の盛んなマジュンガ市。

①児童養護施設支援：首都とアンバトランピ市の子どもたちに文房具・食材・衣類などを、弊会自己資金と有志からの寄付で毎年届けている。

興味を示した子どもたちには植林・移植後の樹木の手入れ・接ぎ木・挿し木の方法などの説明を実施。

それぞれに約80名の子どもたちが在籍しているので、この10年間の累計では、約1,600名の子どもたちと知り合うことができた。いずれ大人になった時に自分たちでも植林をやってくれるだろう。



子どもたちも参加して植林

②植林：首都郊外とアンバトランピ市では、侵略的外来種のユーカリやカリビヤ松を根っこから掘り起こし、固有樹種に植え替えている。固有樹種の森で無ければマダガスカル固有動植物は繁殖できない。種まきや苗木を育てるための苗床も年々拡張・充実してきた。同時に技術移転も進めてきた。固有樹種植林だけでなく日本の国花、桜の植林も各地で実施。

マダガスカルでも桜はサクラと呼ぶようになった。既に開花している短い距離の桜並木もあるが数年後には、延長数キロ、本数2,000本以上の桜並木ができるでしょう。



日本大使館前の桜並木

今は貧しいがこの国の未来は明るい

アジア母子福祉協会 ミャンマー総支部長 理事 富田裕行

「世界寄付指数(思いやり指数)」という言葉を知ったことがおありでしょうか。

これは、英国のチャリティー団体「Charities Aids Foundation」が140か国で寄付行為やボランティア活動について調査した結果です。調査は以下の3項目にて行われます。

- ・困っている見知らぬ他人を手助けしたか
- ・チャリティー団体などに寄付をしたか
- ・ボランティアとして自分の時間を費やしたか

このランキングで、ミャンマーは2017年まで1位となっていました。

私たちがミャンマーへ移住して2年10か月になりますが、バスに座っている乗客が立っている人の手荷物を持ってあげたり、年配の人が乗ってくると乗り降りを手助けしたり、いろいろな場面で寄付する光景などもよく見かけます。

ミャンマーでは仏教の教えに従って、「慈善の精神」が尊重されているとともに、「施しが来世の幸福をもたらす」との考え方が日常生活に根付いていることを毎日の生活の中で実感し、豊かな気持ちになります。

AMCWAが取り組んでいる児童養護施設から大学に通う学生たちに対する支援も二年目を迎え、毎年面談する学生たちが確実に成長している姿を見るとAMCWAの一員として大変嬉しいです。

中学校建設から子供教育サポートへ

アジア母子福祉協会 常務理事 小池匠

私がミャンマーに最初に入ったのは2012年だった。その時出会ったヤンゴン歯科大学の学長テンチュー先生に翌年会いに行った時に食事に招待された。その際、私の隣に座っていたのが女性内科医ニーニー先生であった。ニーニー先生の生まれた村には中学校がなく、交通事情の悪い村では、歩いて行ける範囲に中学校がないと中学校進学が難しいとのことであった。費用は日本円で160万円、何とかかなりそうだったので私はミャンマー子供教育サポートを立ち上げ中学校建設に取りかかった。

2015年中学校は完成した。しかし、現在小学校高学年の校舎となっている。教員は学校が完成すれば政府が派遣してくれるという事であったが、実際はそうはならなかった。そればかりか小学校の教員の給料があまりにも安く支援が必要になり、ニーニー先生に頼まれるたびに給与補助をすることになった。

2013年当時の教員の給与は5万チャット、日本円で6,500円くらいであった。しかしインフレで現在の5万チャットは日本円で4,000円になってしまっている。今は日本円で田舎の平均月収が1万円くらいなので4,000円は半分以下である。先生方は子どもに教育が必要であるという使命感から教員を続けているという事であった。そういった事情を聞くと何とかしなければとも思ってしまう。

こういった活動がアジア母子福祉協会理事寺井融さんの目に留まり、ミャンマー子供教育サポートはアジア母子福祉協会の下部組織として活動することとなった。中学校を造ったらやめてしまおうと思っていたミャンマー子供教育サポートは今も細々と存続することになった。

今後の課題はいかに資金を集め効果的に資金を現地に届けるかという事である。ミャンマー子供教育サポート会則の一つは、頂いた寄付は100%寄付に回す、という事にある。現地まで行く費用はすべて自腹である。ボランティアというものは、活動費は有償で行うという考え方もあるが、ミャンマー子供教育サポートは小さな団体であるがゆえ寄付していただいたお金はすべて寄付にできるという利点もある。大きくしないように小さくなりすぎないように自分のできる範囲内でできることを少しずつ長く続けていくのがこれからの課題であり展望でもある。



故 川畑俊彦会長

最後に、ミャンマーに初めて私を導いてくれた故川商川畑俊彦会長にこの文章を捧げたい。川畑会長無くして私のアジア母子福祉協会理事としてのミャンマーの活動も無かった。今はミャンマーという素晴らしい国と関わることが出来たことに感謝をしたい。

医療機器供与プロジェクト実現まで

—太陽生命様のご決断に今も深く感謝—

アジア母子福祉協会 常務理事 大谷光弘

2011年1月連邦議会が開かれ、3月に大統領にティン・セイン氏が就任し軍政に終止符を打つことから、AMCWAにおいても本格的に活動を再開しようと、同年11月に調査団を派遣した。調査団は首都ネピドーで保健省やMMCWA、ヤンゴンでは新ヤンゴン病院、日本大使館などを訪問し、ペティットキン保健大臣を初めとする多くの関係者と面談を重ねた。

その結果、1984年に日本のODAで建設され、ヤンゴン市民に日本病院として親しまれている新ヤンゴン病院に、乳がん・子宮がん検診用の超音波診断装置をできるだけ早い時期に供与することで合意した。帰国後直ちに調査したが、当てにしていた外務省の資金の活用は、確実に実現できるか不明であり、実現できても我々の推定より遥かに長い時間を要することが解り、途方にくれてしまった。しかし、幸いなことに太陽生命の大石会長様に面談の機会が有ったことから、案件の意義をご説明申し上げ財政的な支援をお願いしたところ、快諾いただけただのである。新ヤンゴン病院関係者の期待を裏切らずに、約束が守れると確信した際の安堵感や感激は今でもはっきりと記憶している。

そして翌年5月には約束した超音波診断装置を新ヤンゴン病院に、更にヤンゴン小児病院へ新生児用黄疸診断装置（総ビリルビン測定装置）の供与を実現した。ミャンマーの優しく美しい



太陽生命大石会長(当時)

ご婦人の乳がん・子宮がんや国の将来を背負う新生児の黄疸の早期発見、早期治療実現に貢献することが出来たのである。黄疸診断装置は到着数日後には使用開始したとの報告を受け、この機器が小児病院にとって必須の検査機器であり首を長くして待ち望んでいたことを再認識した。

その後も太陽生命様からは継続的にご支援いただき、更にオムロン様からは保健省の農村部高血圧対策用電子血圧計案件、川商グループの故川畑会長のご好意による新ヤンゴン病院向救急車案件などを具体化することが出来た。AMCWAが継続的な医療機器供与案件を実現して存在価値を維持できたのも、全てのご支援者様のお陰であり、特にその端緒を作っていただいた太陽生命様には深く感謝し、今後のご支援を改めてお願いする次第である。

幸運に恵まれて

アジア母子福祉協会 常務理事 事務局長 柳澤信一郎

当協会は設立当初よりMMCWA(NGOミャンマー母子福祉協会、会員数約496万人)と緊密に連携し、里親制度、文具贈呈、医療機器贈呈、相互交流や広報活動などを日本政府や幅広い企業、個人支援者のご協力で実施してきました。

私の関わりは寺井現監事のお誘いで65歳目の2013年10月、ミャンマー視察旅行に参加して以来です。経営コンサルタントなのでまずMMCWAが在ミャンマー日本大使館に傘下幼稚園新設のための草の根無償資金申請を行うお手伝いからはいりました。

ターゼン・ヌエ事務局長の英文申請書づくりをメールでお手伝いし、最後はネピドーの本部で申請書を仕上げ共に大使館に持ち込みました。しかし「申請は地元から」と不受理、なんとか「州レベル」が認められ実現に至りました。地元からと知っていたらミャンマー語の申請は手伝えませんでした。「幸運」はその後もくりかえしています。

2014年から連合の愛のカンパ支援をいだけ幼児教育事情調査や10近くの幼稚園の施設整備支援、そして外交官梁井様未亡人のご寄付で児童養護施設サマタン園(在籍約1000名)への大学生奨学金支給、さらに同園の農業による自立支援と多くの方々のご協力で活動が展開しています。

サマタン園では農園向上と園生のグループ活動の両面での支援を開始し、この取り組みは寄付金頼みの園と高校卒業後の園生の双方の自立に大きな意義があります。100ha、40か所近くの農場の活用、運営体制の整備、設備投資など課題が山積です。年間や短期研修を提供いただいている(公財)オイスカ様や卒業生のルウィンさん、東農大講師OBの富田氏にはこの場を借り御礼申し上げます。

MMCWA支援では幼稚園教師のレベルアップなど運営面にも取り組んでいます。同じ一万円がミャンマーでは日本の何倍もの価値を持ちます。MMCWAそしてサマタン園支援に知力、労力、資力などできる範囲で支援いただきたくお願いいたします。

きっかけは“ウイルス”

アジア母子福祉協会 常務理事 渡邊伸一

映画監督でAMCWA理事でもある千野皓司さんの京橋事務所、いつもの飲み仲間との宴席。同じく理事だった原田哲さん(故人)が、「最近、元大使からのメールがウイルスに感染しているようなので、なべちゃん行って見てあげてくれる?」、外資系企業で情報システム部の管理職経験者だった私への要請でした。

山口理事長のお宅は鎌倉の海沿い、玄関にはシーラカンスの藍色の魚拓。相模湾の水平線を臨む二階にお邪魔して、ノートパソコンと向き合いました。当時のネット環境はアナログの電話回線で、通信速度は1.2KB

先達に感謝

アジア母子福祉協会 監事 寺井融

私をミャンマー好きにした先達の一人が、会田雄次京大教授である。お会いした際、「ビルマ人は可愛いよ。ぜひ行かれたらいい」と薦められた。『アーロン収容所』(中公新書)の作者である。竹山道雄の『ビルマの豎琴』の世界しか知らなかっただけに、響いた。

1982年、佐々木良作民社党委員長が、南北問題に取り組む。「アジア調査団」を、東南アジア各国に派遣することとなった。一人一か国を担当。一、二週間滞在し、調査する。

当方は、ビルマを希望した。成果は『9か国85日間のアジア』(南北問題日本委員会)に収録されている。

88年にヤンゴン暴動が起こり、89年に国名がミャンマーとなった。93年に再訪。自由化が進み、経済発展中であった。感想を月刊誌に発表。PHP研究所主宰のミャンマー研究会に誘われる。

そこで、泉谷達郎元陸軍中尉に合う。元南機関員で、名著『ビルマ独立秘史—その名は南機関』(徳間文庫)の著者である。「少数民族ゲリラと言ってもね、ケン栽培や密貿易で儲けて装備をそろえた軍隊から、そのへんのゴロツキみたいなものまであるよ」と教えられた。「一緒に訪緬しないか」と言われたけれども、仕事の都合でかなわなかった。帰国後「ネ・ウインが歓迎宴を開いてくれてね、『上官殿、お達者でいらっしゃいますか』と日本語で挨拶されたよ」との報告を受けた。

2000年3月末に、そのミャンマー研究会を発展させて、NPO法人アジア母子福祉協会を発足させる。

理事長は山口洋一元ミャンマー大使。『ミャンマーの実像』(勁草書房)や『歴史物語ミャンマー上下巻』(カナリア書房)の著者である。

御三方に、ミャンマーについて教わった。もっと幅広く言うと、矢野暢京大教授(『南進の思想』中公新書)や近藤紘一産経新聞記者(『サイゴンから来た妻と娘』文春新書)である。

佐々木委員長にも感謝しています。

程度(現在なら光で100,000KB程)。ウイルス対策ソフトの定義ファイルをダウンロードするのも数時間、スキャンして、ウイルスを退治して、ハードディスクを最適化して。昼過ぎにお伺いしてからパソコンが快適に作動するようになるまで5~6時間かかったと記憶しています。

そんなご縁からAMCWAの事務局を仰せつかり、滞っていた法務局への登記申請や東京都への事業報告、里親制度の支援金のお願いや海外送金、会計ソフトの導入、年会費の請求書から総会のご案内・会報の発送などなど、慣れないNPOの事務仕事を本業の傍らにお手伝いして14年。昨年度で事務局を引退させていただきましたが、新型コロナウイルスが世界中で猛威をふるっている今日この頃、凶らずも当時のことを思い出させていただいた次第です。